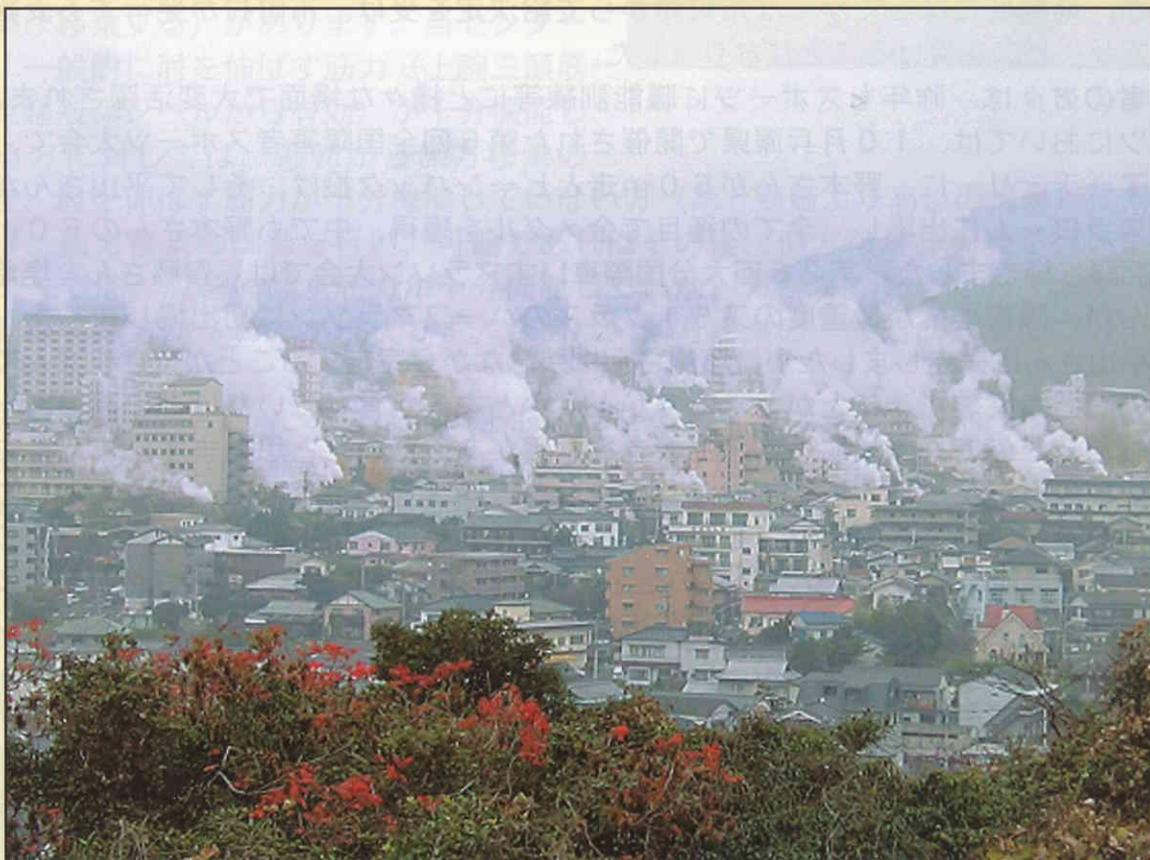


# センターだより

第66号

発行  
平成19年1月



別府市鉄輪の湯けむり

指定障害者支援施設

国立別府重度障害者センター

# 新年を迎えて

所長 江原 徳至

新年あけましておめでとうございます。皆様方におかれましては、つつがなく新春をお迎えになられたこととお喜び申し上げます。

昨年は、10月から障害者自立支援法が全面施行されスタートしました。当センターも大分県から指定障害者支援施設の指定を受け、昼間は自立訓練（機能訓練）を夜間は施設入所支援を実施する施設となりました。それに伴い利用方法が変わりました。これまでは、利用希望者が直接センターへ申し込んでいましたが、新制度になってからは市町村から支給決定を受け、市町村が発行する受給者証を持ってサービスを受けることになりました。



利用者の方々は、昨年もスポーツに職能訓練等にと様々な場面で大変活躍されました。スポーツにおいては、10月兵庫県で開催された第6回全国障害者スポーツ大会で、森田さんがアーチェリーに、野本さんが60m走とビーンバック投げ、そして平山さんが60m走とスラロームに出場し、全ての種目で金メダルを獲得、中でも野本さんの60m走は大会新記録に輝きました。第26回大分国際車いすマラソン大会では、齋藤さん、塩飽さん、平山さんが、障害程度が最重度のT5.1クラスのハーフマラソンに初出場しました。齋藤さん、平山さんは完走しましたが、塩飽さんは残念ながら完走することができませんでした。5kmの関門を突破することができるのかどうかと本人が言っていたほどの高いハードルへの挑戦だったので、参加することに大きな意義があったのだと思います。また、この大会には以前当センターに入所していた井上さんが、四度目の挑戦の末、日本人として初めてT5.1クラスでのフルマラソンを完走しました。これは身体機能の差からいうとT5.4クラス（身体機能が一番良いクラス）の選手の世界記録に匹敵するほどの快挙だそうです。

訓練の成果としては（利用者は、修了後の職業自立を図ることを目的として、パソコン関連の訓練と手織り、トールペイントの手工芸訓練を行っています。）、山津さんが、佐賀県の「第6回障害者作品展」に手織り作品を出展し知事賞を授賞しました。また、初級システムアドミニストレータ試験や簿記試験などには5人の利用者が合格しています。このように日々の訓練に前向きに取り組み、自分自身の立てた目標に向かって挑戦する姿はとても素晴らしく、周りにいる私たちもたいそう励みになりました。

これからの課題としましては、利用者の身体的機能の向上と併せ、個々に応じて職業的自立が実現できるようにすることが重要です。そのために、各利用者の可能性を見極めながら、訓練方法、使用器具、新しい訓練種目などの検討をこれからも続けていきたいと考えています。同時に、当センターのリハビリ訓練方法、評価方法等の成果を積極的に全国の施設・病院へ提供し続けることも、障害者のリハビリ向上を図るためには重要なことだと考えています。

今後も、頸随損傷をはじめとする重度身体障害者の方々の自立支援に向け、職員一丸となって取り組んでいきたいと思っておりますので、本年も昨年と変わらぬご支援・ご協力を賜りますようどうぞ宜しくお願い申し上げます。



脊髄損傷者（以下、脊損者）において、車いすから何かに乗り移る（以下、移乗）ということは、重要な動作のひとつです。例えば、車いすからベッド・トイレ・風呂・自動車などへの移乗があります。脊損者が行う移乗動作には、主に側方移乗（車いすを移乗する対象物に対して斜めに付け移乗する）と前方移乗（車いすを移乗する対象物に対して垂直に近づけて両下肢をベッド上に挙げ移乗する）があります。当センターでは、一般的に肘を伸ばす筋力（上腕三頭筋、第7頸髄残存レベルから有効）が十分機能している方に対しては、最初から側方移乗の訓練を、肘を伸ばす筋力が十分機能していない方（第6頸髄より高位の損傷）に対しては、最初は、前方移乗の訓練を行い、可能であればその後、側方移乗の訓練を行います。当センターでは、肘を伸ばす筋力が十分機能していない方が多くいるため、まず、前方移乗を訓練する方が多いのが現状です。今回は、前方移乗の一般的な方法について説明します。

前方移乗訓練を行うためには、両上肢で自分の体を支えたり・床面を押したりする、上肢の筋力やバランス能力等が必要です。それら移乗に必要な能力が向上することに合わせて、移乗動作の訓練を開始します。訓練の内容は降車（車いすから降りる）・乗車（車いすへ乗る）の2つに分けられ、訓練室で動作獲得後、実際に居室等日常生活で行います。例えば、ベッドへの前方移乗動作の場合は、ベッドに足をあげる動作・前に進む動作・お尻の向きを変える動作・車いすに乗る動作・靴を脱ぎ履きする動作など、訓練を進めるにあたり一人一人違った課題が出ます。これらの課題に対して、観察・評価を行い、

訓練内容や動作方法の工夫・環境整備（足挙げ紐・体幹枕・膝ベルト・すべり布・トランスファーボード・足底板等）や自助具の適合を行います。特に、トランスファーボードは細部の調整が必要となりますので、作業療法士が、対象者の動作を確認しながら慎重に作製します。作業療法でのベッドへの移乗動作は、訓練開始から長い時間をかけて獲得を目指す動作のひとつです。動作獲得には、理学療法での基本動作訓練は欠かせません。それぞれの動作訓練はどちらも重要ですので、根気よく継続した訓練を行うことが大切です。



トランスファーボード（コの字型）



前方移乗

# 第26回大分国際車いすマラソン大会

美由真 朝夕 士が職業科

運動療法士 木畑 聡

「塩飽さん、あと2m! もう少し」。舞鶴橋の坂の最後で、コースを右にそれていく塩飽さんを反対側車線とを仕切る三角コーンが阻みます。周囲で応援している人たちが後方からそつと後押しするように手拍子とともにゆっくりと囲み始めます。声援に守られながらろうじてハンドルを切り、最初の難関舞鶴橋を登りきることができたのです。弁天大橋ではセンターから応援の皆さんが待っています。そこまでたどりつくことを祈りながら、私は舞鶴橋を後

に次のポイントに移動したのです。

平成18年10月29日11時03分、近年ではめずらしく風も穏やかな晴天のコンディションの中、第26回大分国際車いすマラソン大会のハーフマラソンがスタートしました。今年センターからは齊藤さん平山さん塩飽さんの3名が出場しました。

いずれもT51クラス(車いすマラソンでは最も機能的に重度のクラス)での参加です。3人が目標としている完走を阻む5km関門の突破に向けて挑戦です。

私は弁天大橋の中央部3km地点で、やってくる選手を待ちます。時計は、16分が過ぎようとしているところです。まず、平山さんが通過していきます。大会の直前で体調を崩していましたが元気そうです。17分が過ぎました。そろそろ5km関門通過がきわどい時間です。17分30秒、齊藤さんが前方の1点だけを見つめながら、奥歯をぎゅっとかみ締め通過していきます



ウォーミングアップ中の齊藤選手

「残り9分30秒、行けますよ! ぎりぎりです」。ちょっとこちらを見たようです。気づいてくれたかな。

その後、伴走をしている職員から私に次々と電話がありました。平山さんと齊藤さんが5km関門を通過したこと。塩飽さんが目標としていた弁天大橋の登りまで到達したこと…。今大会では、平山さんと齊藤さんの2名が完走することができました。平山さんについては、クラス3位入賞です。塩飽さんは、完走はなりませんでしたが、目標としていた地点まで到達することができました。3名の選手は「やればできる」という大きな可能性を私たちに示してくれました。今年も新たな挑戦者とともに大分国際車いすマラソンに取り組んでいきます。



レース後の齊藤選手と塩飽選手

### の笑みの野本選手

を出し、また大会3日目には60m走で18秒65の記録を出して、2種目で金メダルを獲得しました。野本さんは、大会初日はビーンバック投げで2m53cmの記録を出して金メダル。大会3日目の60m走では、大会記録を2秒以上も上回る49秒61の大会新記録を出して、2種目で金メダルを獲得しました。

アーチェリー競技に出場した森田さんは、コンパウンド30mダブルラウンド種目で時折強い風が吹く中、72射で413点を出して、金メダルを獲得しました。センターから出場した3選手とも各競技種目で金メダルを獲得できました。

大会前は、5泊6日ということで、いろいろと心配な面もありましたが、センターから参加した選手もメダルを獲得して無事に大会を終えることができました。スポーツを通し、いろいろな人と接する事ができ、センターだけでは体験できないことを、大会の思い出をそれぞれに持ち帰ることができました。センターに戻ってから数日後、広瀬知事への結果報告会が県庁で行われました。2008年は大分県で第8回全国障害者スポーツ大会が開催されます。